

# 玄海プルサーマル裁判ニュース

No.27

発行日 2018.9.9



発行者: 玄海原発プルサーマル裁判を支える会 会長 澤山保太郎  
 編集者: 玄海原発プルサーマルと全基をみんなで止める裁判の会 代表 石丸初美  
 〒840-0844 佐賀市伊勢町 2-14 TEL 0952-37-9212 FAX 0952-37-9213  
 編集責任 永野浩二

E-mail: saiban.jimukyoku@gmail.com  
 URL: http://saga-genkai.jimdo.com/  
 Facebook: http://www.facebook.com/genkai.genpatsu  
 Twitter: @sagakarakaeru

ただいま  
進行中!

裁判終了

## 玄海3・4号機再稼働差止仮処分

被告: 九州電力 2011.7.7申立 2017.6.13不当判決 2017.6.27即時抗告

## 玄海全基運転差止裁判

被告: 九州電力 2011.12.27起訴 2015.10.30追加起訴

## 玄海3・4号機許可処分取消行政訴訟

被告: 国 2013.11.17起訴 2017.12参加人(九電)加入

## 玄海原発3号機MOX燃料使用差止裁判

被告: 九州電力 2010.8.9起訴 2015.3.20不当判決 2016.6.27控訴審不当判決

# 犠牲の上にしか成り立たない原発はいらない

## 福岡高裁・仮処分抗告審始まる

九州電力は3月に再稼働させた玄海3号機に続き、6月16日に4号機を再稼働させた。試運転中に、一次系冷却材ポンプで事故が起きたが、対処療法で済まされた。

原発はトイレなきマンション。動かせば必ず出てくる使用済み核燃料の行き場も処理方法も決まっていな中、核のごみを増やし続けるのは、未来の世代にあまりに無責任である。

再稼働差止仮処分抗告審も始まった。裁判と運動を通じて、すべての命に被ばくという犠牲を強いる原発を、みんなのチカラで止めよう。



6/8 福岡高裁仮処分抗告審後の報告集会

## 4号機 一次系冷却材ポンプ事故

### 構造的欠陥を置き去りにして再稼働

#### 一次系のポンプ事故は構造的欠陥

5月2日、再稼働へ向け試運転中の玄海原発4号機で、放射性物質を含む一次系冷却水を循環させるポンプ2台で、流入防止用の水の流量が通常の2倍にも増える異常が見つかった。異常のあったポンプのシール部は「157気圧、300度」という過酷な状態で流れる一次冷却水の圧力に耐えている部品同士が相対的に移動しており、内部から液体が漏れるのを防ぐのは至難だと言われている。

同様の事故は玄海原発1号機で1999年1月に通常運転中に起きて原子炉を停止したほか、2005年10月の関西電力美浜原発1号機、2016年7月の四国電力伊方原発3号機など、全国の原発で相次いできた。元東芝の技術者・小倉志郎さんは伊方の事故後、「一次系冷却材ポンプのシール部は、原発のアキレス腱だ。恐ろしいのはこの構造的欠陥、ポンプの軸受け部の

シール技術の未確立から繰り返されてきた水漏れ故障事故が、冷却材喪失事故に直結する可能性があること」だと指摘している。(守田敏也さんブログ「明日に向けて(1518)5月8日」)

「エアコンが効いてなかったから」!?

#### 安全神話どっぷりの九電

5月9日、九州電力本店に対して、抗議と再稼働中止を求める要請を行った。質問に対して、九電はこの日は回答せず、1か月後の6月11日に回答の場が設定された。

九電「水温が3度上がったために満水にしていた水の体積が膨張し、シール部が壊れた」

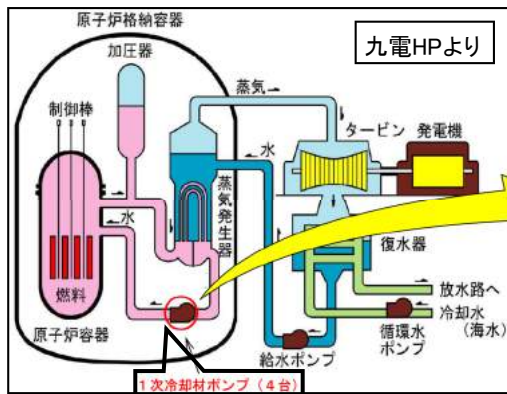
私たち「その程度で壊れるのはそもそも欠陥品ではないか?」

九電「今回はたまたま満水時にエアコンの空調が効いていなかったの、水温が上がってしまった」

### No.27 CONTENTS

- 玄海4号機再稼働・ポンプ事故 …1
- 乾式貯蔵施設建設反対 …3
- 立地自治体と同等の地元同意権を! …4
- 8周年活動報告会／主な活動経過 …5
- 日本が核発電を諦めない理由(1) …6

- 裁判闘争に関する動き …7
- 原告意見陳述 橋本加奈子 …8
- 原告意見陳述 松村知暁 …9
- 戦争と原発を許さない福岡市民の会 …11
- リレーコラム／お知らせ …12



…あまりにお粗末な理由に、私たちは開いた口がふさがらない。「再稼働にあたって万全を期す

ため」に満水状態にしたのに、今後はそうしないという。では、今まで満水にしていたことは、間違っていたということか。原因は特定できたとはとても言えず、対処療法に過ぎない。

私たち「今回は一次系の事故だ。放射能が格納容器の外に漏れ出てくる事故に進展したかもしれないから心配している。」

九電(担当者らは顔を見合わせて笑いながら)「水は回収して、系統外には漏れ出さないように対策をしているので、漏れるということはありません」と言い切った。「安全神話」そのものだ。

結局、同じ部品を使っている3号機は点検もせずに、4

号機の該当部位の部品交換だけ行い、専門家からの意見聴取も行わず、構造的な欠陥を置き去りにしたまま再稼働を強行した。

### 立入調査も行わず、原因追及もしない知事

3号機蒸気漏れ事故の際にも問題となった、九電から自治体への通報連絡。九電は「今までより早い段階で対応した」というが、5月2日16時異常発生から、自治体への最初の通報は19時間後の翌3日11時。事故進展が早ければ、報告すべき案件か判断している間に、住民は放射能から逃れることが困難になりかねない。しかし、佐賀県は問題視しなかった。また、県は九電と締結した安全協定に明記されている「立入調査」も行わず、蒸気漏れ事故時に設置した情報連絡室を今回は設置さえしなかった。

私たちは5月10日に山口祥義・佐賀県知事に対しても要請・質問書を提出した。しかし、回答が来たのは2か月後、4号機がすでに再稼働された後の7月10日付だった。あまりに遅すぎる。

回答内容は、九電からの一方的な説明を県ホームページに載せたというだけで、原因追及や安全確保などを主体的に行おうとする姿勢はなかった。再稼働同意撤回をあらためて求めたことに対しては、「再稼働はやむを得ないと判断した」という昨年4月の知事同意の時の言葉を繰り返すばかりだった。(文責 永野浩二)

### 全国原発で相次ぐトラブル

2015年8月に川内原発1号機が、3.11後全国初の再稼働をした時に「4年以上停止した世界の原発14基すべてで運転再開後にトラブルがあった」と言われていた。その後、再稼働後の事故・トラブルは必ずといっていいほど起きている。「たまたま」深刻な事故に至らなかったにすぎない。これらを深刻な警告として受け止めず、根本的な対策も行わず、住民の不安に真摯に向き合わない電力事業者に対して、私たちの怒りは増大す

るばかりだ。二度目の大事故が起きる前に、なんとかしても止めなければならない。

#### 再稼働後の事故・トラブル

- 川内1号機 2015年8月 復水器海水混入
- 高浜4号機 2016年2月 一次冷却水漏洩
- 伊方3号機 2016年7月 一次系冷却材ポンプ
- 玄海3号機 2018年3月 配管穴あき蒸気漏れ
- 玄海4号機 2018年5月 一次系冷却材ポンプ
- 大飯4号機 2018年5月 蒸気発生器水位計

## 「原発技術の伝承は国民の責任」「処分場 みんなで努力を」 九州電力社長の無責任発言に抗議を！

6月27日、九州電力社長に池辺和弘氏が新たに就任し、新聞各紙で池辺氏へのインタビューが相次いで掲載された。その中で池辺氏は「原発技術の伝承は国民の責任」、「(核のごみ)処分場確保へみんなで努力を」(朝日新聞6月28日)などと語った。一企業の活動の伝承が何故私たちの責任なのか。一企業の出したゴミの処分に関して何故みんなが努力をしなければならないのか。



「何が起るか分からない」発言の瓜生道明氏(右)から社長職を引き継いだ池辺和弘新社長(左) 後始末を押

さらに「(再エネよりも)原子力のほうが成熟した技術だ」と、10万年

し付ける未成熟の技術を「成熟」だと強弁し、事故時の対応を問われ「私が原子炉を止めに行く」などと、稚拙な精神論を語った。

これらの言葉は、九州一を標榜する九州電力という会社が究極の無責任体質であり、甚だしく倫理観の欠如していることを露呈している。このような企業が原子力という人類の手に負えない技術を弄ぶことを決して認める事は出来ない。

私たちは、知事に対して、社長が発言を撤回するよう求めたが、知事は「社長と面談時にそれらの発言はなかった」「報道内容しか承知していない」として「社長に撤回を求める考えはない」と文書回答。社長発言を容認するのは、知事も同様に無責任であるということだ。社長にも直接撤回を求めていく。

#### ★抗議の電話を！

→九州電力本店 = 092-761-3031



# 玄海原発使用済み核燃料 乾式貯蔵施設建設反対！ 核のごみをこれ以上増やしてはならない

九州電力は玄海原発3号機と4号機を相次いで再稼働させた。使用済み燃料プールは管理容量2271体(1130tU)に対して、すでに1823体(900tU 8)が貯蔵されており(80%)、稼働後5～7年で満杯となることから、九電はぎゅうぎゅうに詰め直すリラッキングと新たな乾式貯蔵施設建設を検討してきた。8月30日には社長が乾式施設の「敷地内」建設方針を明らかにした。

## 半永久的に玄海の地に…

しかし、保管後の「搬出先」としている六ヶ所村の再処理工場は動くあてもなく、核燃料サイクルは実質的に破綻している。核のごみが玄海の地に半永久的にとどめおかれることになりかねない。保管中の安全性も保証されていない。こうしたことから、7月26日、設置許可の事前了解権限を持つ山口祥義・佐賀県知事に対して、リラッキングと乾式貯蔵施設建設を認めないよう求めて要請を行った。

7項目の質問に対して、8月16日付で文書回答が届いた。「九電からは具体的な話はあってない」として、「県民の安全を何よりも大切に、具体的な話があればしっかりと伺いたい」と3度も繰り返すなど、質問をはぐらかす回答ばかりだった。主な質問と回答は以下。

## 中身なし はぐらかしの知事回答

・質問「使用済み燃料の処分について九電とこれまでにどんな具体的な約束・協議をしてきたのか」  
回答「県が九電と約束したものはない」「申請書に『再処理を原則とする』として許可されている」。

放射能という危険物の取扱の処分について、具体的に何も取り決めをせずに、稼働を許してきたのだとすれば、あまりにも無責任だ。また、3年前には県と九電が乾式貯蔵施設について非公開で協議をしていたが、九電が一方的に公表したことを県が抗議したということがあった。県は「現在、具体的な話はあってない」と逃げるが、内容を県民に隠さずに明らかにすべきだ。

・質問「MOX燃料はあと2サイクルで使用済みMOX燃料となる。プールでの貯蔵期間や、搬出先の完成予定は？」

回答「原則として再処理されるまでの間、適切に貯蔵・管理するとして、国から許可を受けている」「処理方法は国が研究開発を進める」…として、具体的に何も答えず、県民の命の安全の責任を国に丸投げした。

・質問「リラッキングの危険性を県として検証したのか」

回答「国がしっかり審査している」

・質問「発電所に隣接する12haもの広さの土地が重大事故時の資機材置き場として造成中だが、乾式施設に用途変更することはないのか」

回答「県議会で九電が『資材置き場であり、それ以外の目的について使うことは一切考えていない』と答弁している」。

免震重要棟建設撤回など、これまで九電は約束違反をたびたび起こしており、警戒が必要だ。



## 「同意するつもりはありません」発言

7/26 佐賀県知事へ要請・質問

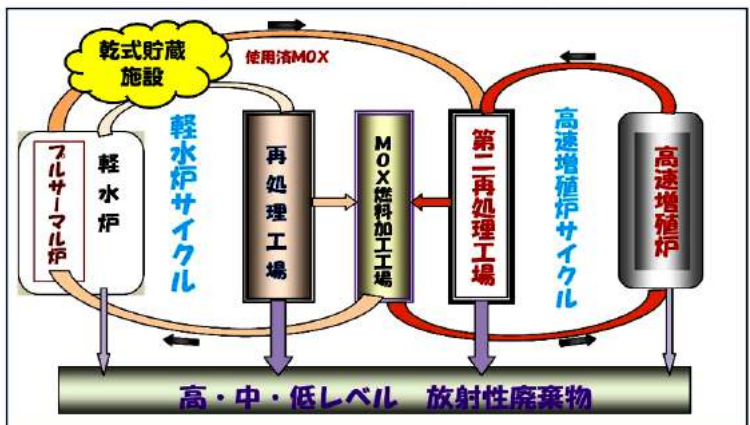
知事は昨年5月の定例会見で「(核のごみ最終処分場について)新たなものは受け入れたくないという考えに変わりはないか」との質問に対して、再稼働同意を表明した4月24日の会見時の言葉を引用して、『もし仮に、今新たに原子力発電所をつくるという判断を求められたとしても、私は決して同意するつもりはありません。(しかし、現に存在している原発の再稼働はやむを得ない)』と述べたが、基本的な方向はそういつたことでご理解いただきたい」と答えた。核のごみ関連も含めて、新たな原子力施設には同意しないのが基本だと自ら表明したのだ。そこで、「九電が検討している乾式貯蔵施設についても新たな原子力施設と理解していいか」を質した。しかし、知事は会見での発言を繰り返して記載するだけで、質問に回答せず、逃げた。

乾式貯蔵施設建設は、核燃料サイクルが破綻している現実を覆い隠し、核のごみをさらに増やして未来の世代に押し付けるものである。

私たちは、放射能の後始末に何ら責任を持とうとせず、核のごみを垂れ流し続ける九電と国、そして「九電の言いなり」「国に丸投げ」の知事に対して、リラッキング・乾式貯蔵施設建設反対、玄海原発即刻停止を、引き続き求めていく。

「敷地内」表明もあり、今後話が急速に進んでいくことが予想される。国会議員の「中間貯蔵議員連盟」も発足したという。全国の仲間との連携を強めていきたい。(文責 永野浩二)

図2 1. 核燃料サイクルと放射性廃棄物の概念図



破綻した「核燃料サイクル」を「まわる」ことにして、現実を覆い隠す「乾式貯蔵施設」…MOX裁判訴状(p.49)に加筆





玄海3・4号機が営業運転を再開した今、危険性はそれだけ増えた。また、リラッキングや乾式貯蔵施設建設、2号機の運転延長問題、4号機プルサーマル※など、問題が山積している。これらに対しても事前了解の権限がなければ住民の命を守ることはできない。

8月31日、峰・唐津市長は就任したばかりの玄海町の脇山町長と面談したが、注目された安全協定問題についての話題は、どういうわけか触れなかったという。首長や議会を動かすためにも、住民からの行動が必要である。自治体や議会への要請、請願などを続けていこう。

※＝玄海町長に初当選した直後、脇山伸太郎氏は「4号機へのプルサーマル導入は、正式な話もないが、必要性は理解」と話した。他電力会社のプルトニウムを玄海などで消費できないかの検討を国が求めており、今から反対の声をあげていく必要がある。

### ■玄海原発周辺自治体の安全協定の現状(左表)

周辺自治体はそれぞれ九州電力と「安全協定」を締結しているが、その内容には大きな格差がある。

- ・施設変更時、「事前了解」が認められているのは玄海町と佐賀県だけ。
- ・唐津市と伊万里市は「意見申出ができる」が、糸島市と長崎4市には情報提供・説明だけ。

・唐津市と伊万里市は「立入調査を県に要請でき、同行できる」が、糸島市と長崎4市はそれぞれ県の立入調査が認められているだけ。

・伊万里市は佐賀県との覚書で「市の意向を配慮する」と盛り込ませたが、現実には「再稼働反対」という、伊万里市の意向は配慮されず、無視された。

・「意見申出」さえ保障されていない松浦市、平戸市、壱岐市の「再稼働反対」の意見も無視された。

### ■他原発との比較：自治体の立場が弱い

また、他の原発立地地域と比べると、立地自治体にとって立場が弱いものとなっており、住民の安全・安心を担保するためには抜本的な見直しが必要である。

・事前了解事項の中に、美浜原発では新設を含むと明記され、伊方原発では「3基を限度」と増設を認めない旨が記されているが、玄海にはそうした記載はない。

・異常時の措置では、美浜原発では「運転停止を含む」、伊方原発では「原子炉停止」などが明記。玄海では「適切な措置を求める」とだけ記載。

・非常時・異常時の自治体への連絡について、伊方原発では「正常状態以外のすべての事態」を「異常事態」として明記。玄海では異常事態のケースを挙げているが、限定的なものとなっている。

(文責 永野浩二)

## 引き続きご支援よろしくお願いします ～ 提訴8周年年次活動報告会

5月26日、提訴8周年年次活動報告会を行いました。前半は、昨年4月の知事による再稼働同意とその直後の仮処分不当決定以降のあわただしい1年の活動を振り返りました。

後半は、大阪から駆け付けていただいた冠木克彦弁護士団長が、新たな争点となった火山問題を紹介しながら、最大の争点である耐震性の問題について、特に地震の「ばらつき」をめぐる九電や国との論争のポイントを解説し、勝利への展望をお話いただきました。

最後に、リレートークで各地の仲間から報告をいただき、連帯を確認しました。

私たちは、全国の皆様の支えで今日まで裁判運動を

続けてくることができました。心から感謝申し上げますとともに、引き続きのご支援をよろしくお願いいたします。

すべての原発をなくすまで、一人一人が自分にできることを役

割分担して、みなさんとともに頑張りましょう。



### 5月5日以降の主な活動経過

#### ■5月

- 5日 裁判ニュース第26号発行
- 8日 座談会(福岡・早良区)
- 9日 4号機ポンプ事故・九電抗議
- 10日 4号機ポンプ事故・知事要請
- 12日 そいぎミーティング
- 14日 九電佐賀支社訪問(ポンプ事故説明)
- 16日 弁護士会議出席
- 3号機営業運転再開抗議街頭宣伝

- 26日 提訴8周年年次活動報告会
- 冠木克彦弁護士団長講演

- 28日 福岡高裁記者レク

#### ■6月

- 1日 行政訴訟第18回・全基差止第26回口頭弁論
- 意見陳述:橋本加奈子、松村知暁
- 16日 そいぎミーティング
- 4号機再稼働抗議行動(発電所前)
- 加部島ボスティング

- 21日 佐賀県議会総務委員会傍聴
- 4号機発送電再開抗議街頭宣伝
- 26日 佐賀県議会原子力特別委員会傍聴
- 27日 九電株主総会
- 九電交渉相談会

#### ■7月

- 17日 そいぎミーティング・書面学習会
- 19日 4号機営業運転再開抗議街頭宣伝
- 弁護士会議出席
- 26日 知事要請:乾式貯蔵施設反対と九電社長発言撤回

#### ■8月

- 4日 そいぎミーティング
- 9日 九電佐賀支社訪問(説明)
- 26日 東区から廃炉を考える会総会で報告
- 28日 乾式貯蔵施設・知事回答について記者会見
- 29日 座談会(鳥栖・たこ姫)

#### ■9月

- 1日 そいぎミーティング
- 2日 再稼働阻止全国ネットワーク全国相談会参加(茨城)
- 6日 唐津市長へ事前了解権を求める要請書提出

## 日本が核発電を諦めない理由（１）

9月3日、「使用済みMOX燃料 再処理断念／電力10社、費用計上中止／核燃料サイクル崩壊」と報道があった（共同通信・佐賀新聞など）。住民をだまし続けている核燃料サイクルを即刻中止すべきだ。

2018年8月現在、九州電力は川内に続いて、玄海3・4号機を再稼働させています。私たちはいつ起きるか分からない事故に怯えながら毎日の生活を送らねばなりません。特に玄海3号機では亡くなられた藤田祐孝さんが「ストーブにガソリンを入れるような危険きわまりないやり方だ」と言っておられた“プルサーマル発電”が行われています。私たち大人が子どもたち、未来の世代の命を危険に晒し続けて良いはずがありません。だから諦めるわけには行きません。

今回と2回に分けて「核発電」及び「核燃料サイクル」を何故日本が手放さないのか、またそれに伴う深刻な課題、あるいは核のゴミの問題について、一緒に考えてみたいと思います。

### 中曽根予算＝2億3500万円

日本に核発電が導入されるにあたって先鞭を付けたのは、「中曽根予算」と呼ばれている2億3500万円の“原子炉築造予算”です。

1954年3月3日、中曽根康弘氏（当時衆院議員）らが中心となって、当時の保守3党（自由党、改進黨、日本自由党）が突如、54年度政府予算案の修正案を衆院予算委員会に上程、翌4日には衆院通過を強行しました。この日は第五福竜丸がビキニ環礁でアメリカ軍の水素爆弾実験によって発生した多量の放射性降下物（いわゆる死の灰）を浴びたわずか2日後の事です。第五福竜丸以外にも、この海域には多くの漁船があって、その乗組員がヒバクさせられ、日本の漁船だけでも556隻に及んでいたことが、2014年の9月になってようやく情報開示されています。

2億3500万円という数字にどういう根拠があったのか。中曽根は、著書で「ウラン235の235ですよ（笑い）」（『天地有情 五十年の戦後政治を語る』）と述べています。「笑い事じゃない、ふざけるな！」と言いたくなります。

### 「次の時代は原子力の時代」？

何故中曽根氏がこのとき、いきなり原子炉建造予算を計上しようとしたのか、おそらく米国の商業的意図が背景に働いていた事が考えられます。そしてもう一つの目的として、“核の軍事利用”があった事が、いくつかの中曽根氏の言葉から透けて見えます。彼が海軍軍人として高松にいたときに、広島原爆のキノコ雲を見て、「この時私は、次の時代は原子力の時代になると直感した」（『政治と人生—中曽根康弘回顧録』）と言っています。この時、この力を自分も持ちたいと野望を抱いたのだと思います。また「もともと日本に原子力を導入した時から私が目指したのは高速増殖炉でした」（『ほんとうはどうなの？原子力問題のウツ・マコト』上坂冬子著）とも言っています。

この二つの発言を重ねて見ると、「核燃料サイクル」をどうしても日本が手放さない真の理由が見えてきます。

「高速増殖炉」は表向き「使用した以上のプルトニウムを生み出す夢の原子炉」と言われてきましたが、原子炉内で高速の中性子を取り込んだウラン238が非常に純度の高いプルトニウム239になるという特性を持つことを中曽根氏は既に知っていて、何としてでも日本に核武装の道を拓きたいという明確な意志を持っていたのだと思います。つまり「核燃料サイクル計画」と「密かな核武装計画」とは、日本に核発電が導入された時からの真の理由だったのでしょうか。

### 核燃料サイクル＝プルトニウム製造計画

「核燃料サイクル」とは「プルトニウム製造計画」と言っても過言ではないと思います。通常の軽水炉で定期点検をはさんで3サイクル程度使用した“使用済み燃料”の中にプルトニウムが1%程度含まれています。このプルトニウムを取り出す工場が“再処理工場”です。この再処理工場が稼働すると、通常の核発電が生み出す1年分の放射性物質をわずか1日で生み出すと言われ、膨大な放射性物質が環境に放出され深刻なダメージを全ての命が受ける事となります。

今まで日本は“再処理”の技術をもちませんでしたので、六ヶ所再処理工場が完成するまでの間、イギリスとフランスに再処理つまりプルトニウム製造を委託してきました。その結果、イギリスに委託した分、さらにはフランスに委託した分、そして日本国内にあるもの、合わせて47トンものプルトニウムを保有する大国となってしまったのです。長崎の原爆に使用されたプルトニウムは8<sup>kg</sup>ほどとされていますので、実に長崎型原爆6000発分にあたります。

先の中曽根氏の構想では「高速増殖炉」でさらに純度の高いプルトニウムを“製造”する事が目的ですから、もともとは、再処理工場で製造されたプルトニウムは、MOX燃料（プルトニウム燃料）に加工して、「高速増殖炉」で使用する計画のはずでした。つまり「核発電所」と「再処理工場」と「高速増殖炉」はセットで動かなければ、「核燃料サイクル計画」の第一段階を実現する事にはなりません。

ところが、高速増殖炉原型炉「常陽」（東海村）は2007年に事故を起こしたまま動きません。そして東海村再処理工場は今年2018年に廃止が決められました。さらに「常陽」よりも規模の大きな、実証炉「もんじゅ」は、度重なるトラブルの結果、ほぼ稼働することなく、2016年12月に廃炉が決定しました。そして六ヶ所再処理工場は1993年の着工から実に25年を経過しても、23回の完成延期を経て、未だに完成を見ていません。その間建設費だけが増え続け、当初、7600億円の見込みであったのが、2018年現在では実に2兆9500億円にふくれあがっています。

今や「核燃料サイクル計画」は完全に破綻してしまっています。（次号に続く）（文責 野中広樹）

## 2018年5月以降の裁判闘争に関する動き

### 【1】6月1日 行政訴訟・全基差止

6月1日、佐賀地裁にて九電を相手とする「玄海原発2～4号機差止訴訟」第26回口頭弁論と、国を相手とする「3・4号機設置許可取消請求行政訴訟」第18回口頭弁論が開かれた。4月の人事異動で裁判体全員が交代し、3人の裁判官(達野ゆき裁判長、田辺暁志裁判官、久保雅志裁判官)による最初の弁論となった。

14時からの行政訴訟では、双方の反論を確認しつつ、北九州市の原告、橋本加奈子さんが意見陳述した。陳述に際し、2歳の息子を抱っこしながら読み上げることを裁判長が認めてくれ、ちょっと珍しい雰囲気の中での陳述となった。しかし途中で、母親の緊張が伝わってしまったのか「イヤー」と2歳の子が泣き出しぐずりだしてしまった。しばしその様子を裁判長は眺めていたが微笑みながら、「ちょっとムリなようですから落ち着かれるまで、他の弁論を先に進行させましょうか」と配慮した上で、判断を下し進行を変えた。

今回の裁判の原告主張としては、昨年12月広島高裁が火山を理由に伊方原発差止仮処分決定を出したことを受けて「阿蘇カルデラの破局的噴火により火砕流が玄海原発に到達する可能性が小さいとは言えないことから立地不適である」との主張を追加したことを踏まえて、次回に向けて双方の進行ステップを入念に確認した。

陳述者橋本さんが中座から戻ると、裁判長が「続きの部分を陳述されますか」と訊ね、「はい」と受けて続けることになった。彼女は2歳の息子のことを意識しつつ「玄海再稼働後、安定ヨウ素剤をいつも持ち歩いている。どうして電気のためにこのような不安やリスクを負わなければならないのでしょうか」「息子がもう少し成長したら『お母さんはあなたのために頑張ったよ。みんなで原発を止めることができたよ』と胸を張って言いたい」と訴えた。

14時半からの全基差止では、福岡市東区の松村知暁さんが「生まれ故郷は阿蘇市で小学生の頃よく遊んだ阿蘇神社の倒壊に心を痛めている。原発は大地震の可能性を無視している」「ラムサール条約の登録を目指している和白干潟を守る活動に参加しているが、放射能汚染は生き物、自然にとって最悪の環境破壊だ。再稼働してはならない」と訴えた。

佐賀地裁での原告意見陳述はこれまで法廷中央の証言台で行っていたが、裁判長判断ということで当事者席のまま行うことになり、「陳述」ではなく「弁論」という位置づけ、つまり「判決の基礎」になりうる位置づけとなるとのことで、これは新しい変化だ。

なお、この法廷口頭弁論前に、新進気鋭の初裁判長として指揮する達野氏と最高裁判政局付きの経験を有す右陪席の田辺氏による双方弁護団との別室に於いて進行協議が行われ、15点もの事実確認が矢継ぎ早にあった。、法廷の予定開始時間を5分程オーバーしてしまうという様子は裁判を結審させようとする意思の

ような雰囲気  
が漂い、今後、  
法廷でのプレゼン  
の実施を含め、裁  
判もいよいよ大詰めと



6/1 佐賀地裁後の報告集会  
なってきた感じがある。

<次回9月28日(金)、次々回12月21日(金)>

### 【2】6月8日再稼働差止仮処分抗告審第1回審尋

昨年6月13日、佐賀地裁の不当判決に対し即刻の不服申し立てをしてから待たされること1年間、「3・4号機再稼働差止仮処分の抗告審」が、ようやく6月8日に福岡高等裁判所(山之内紀行裁判長)において開かれた。この日、抗告人173名のうち46名、また、九州各地から支援の仲間が集まってくれた。天気にも恵まれ、リレートーク門前集会で繋がってから、入廷した。

私たちは原審(佐賀地裁)で争った基準地震動の過小評価の問題に加え、火山破局的噴火による立地不適も追加主張している。

また、配管問題については、九電の定検や日頃の点検の姿勢、度々のトラブルに関する謙虚な反省がないことや改善策さえ明らかにしない様子など、度々の手落ちを追及してきた。3月30日に発生した3号機配管穴あき蒸気漏れ事故についても、九電の検査体制不備等を追及してきた。しかし、その僅か一ヶ月後に4号機で一次冷却水ポンプ漏れトラブルを起こすなど、検査体制のみならず、設計構造的な欠陥がある。九電瓜生社長の「何が起こるか分からない」という反省の無い発言に対して、私たちは「原発の安全性を軽視し、抗告人ら住民を愚弄する許されないものである」と準備書面で指摘した。

この日、裁判長からは争点内容を把握し理解するため、双方によるプレゼンの場を持ちたいという提案があったが、九電は居丈高な態度で「必要はない」と答えた。しかし、それは退けられ、10月29日(月)14時～新福岡高裁(中央区六本松に移転後)にて、証人尋問プレゼンテーションを実施することになった。この勝負の場は、差止決定を引き出すためチャンスとなり、抗告人の方々もそうでない方も是非ご参集の程、よろしくお願いする次第である。

### ■大飯原発3・4号機運転差止控訴審 不当判決

7月4日、名古屋高裁金沢支部は関西電力・大飯原発3・4号機運転差止止め訴訟において、住民側逆転敗訴の判決を下した。その主旨は「原発の危険性は社会通念上、無視しうる程度にまで管理・統制されている」ので、「運転の可否は政治的な判断に委ねられるべき事柄」、つまり、国がいいと言えば問題無しとしたこと



だ。

「原発の危険性を顧みずに運転を認めるのは行政の裁量権の範囲をはるかに逸脱しており、そういう場合、司法が介入することもやむを得ない」(1審を裁いた樋口英明元福井地裁裁判長:朝日新聞8月4日)のである。

この判決を見ると、国家権力が、最高裁の権力まで動かすようなことが露骨に起こっているようだ。司法の従属によって、三権分立が成り立っているとはとても思えない。ひと昔前のアメリカ製の人気TVドラマにこんなナレーションがあった。「正しかるべき正義も時として、目を瞑ってしまうことがある。法律は神ならぬ人間の手によって作られ、人間が執行するものである。恐るべ

き誤審はここに生じるのだ。・・・その暗黒の中に運命の計り知れぬ力が潜んでいた」と。

司法の良心をかなぐり捨てたこの名古屋高裁の判決に対し、大いなる遺憾の意を表すとともに、私たちは私たちの玄海原発の裁判土俵において、勝利をめざして市民一人一人の安全のために正義を勝ち取らねばならない。強いては、原発再稼働方針の酷さを糾弾していくことにも繋がる。常に頭をひねり、より良い方法を選択しながら、ゆるぎない抗議の意志を法廷内外でもみんなで示して行きたいと思う。

.....  
(文責 荒川謙一)

## 橋本加奈子さん意見陳述 行政訴訟第18回口頭弁論(6月1日)

スケッチ/大江良二



本日は意見陳述の機会をくださってありがとうございます。

私は北九州市に住む37歳の主婦です。夫と2歳になる息子の3人で暮らしています。特別な経歴や経験も無く、ごくごく普通の主婦である私ですが、だからこそ3.11東京電力福島第一原子力発電

所での事故により放射能汚染された日本での私たちの暮らしや育児について、皆さんに知ってほしいと思い今日この場に立っています。

事故当時、私は銀行で働いていました。経済成長や便利さなどが豊かさの物差しとなっていて、それを疑いもしませんでしたし、自分が使う電力がどのように作られているのか、そして原発のことなど無関心でいました。しかし、あの日、事故のニュースを知ったとき、すぐに幼い頃の記憶が鮮明に思い出されました。それは母と一緒に見たチェルノブイリの子どもの写真展のこと、そして、「スノーマン」など絵本作家として著名なレイモンド・ブリッグズが核戦争の恐怖を描いた「風が吹くとき」というアニメーションの「こわい」記憶でした。写真展もアニメも「核の恐怖」というものが描かれ、私の心にしっかりと刻まれていたからです。

事故から毎日ハラハラした気持ちが止まらず、しばらくはtwitterやネットでひたすらに情報を集めました。自分のため、そして関東に住む大切な友人たちのために必死でした。チェルノブイリ原発事故についても改めて勉強し、それらの情報を元に友人たちに一時的にでも避難してほしいことや、水や食べ物に気を付けてほしいことを何度も伝えました。しかし残念ながら、ほとんどの友人たちへ想いは届きませんでした。

情報を迅速に開示しないこの国に対し、疑問と不信感が大きくなっていく中、福岡市内で原発に反対するデモがはじまり、私もひとりで参加するようになりました。そこで仲間が増えひとりひとりと話すうちに、「みんな同

じ想い(疑問)を持っている」と、ほっとして救われたのを覚えています。特に避難者や小さな子どもを連れて懸命に声をあげる母親たちの言葉は切実で、まだ独身だった私も「子どもたちを守りたい」という想いに突き動かされていました。それは私の中で希望にもなっていました。

私が街で声をあげてきたのは、怒りを発散したかったからでも、デモをすれば原発が止まるなどと考えていたからでもありません。動かずにはいられなかったという衝動と、何より原発に対して「NO」と言いたくても言えない人たちに「あなたにも仲間がいる」ということを伝えたかったのです。そして祈りや願いだけでは何も変わらないこと、小さくても行動することから社会を変えられることを自らの行動で示したかったのです。

私は2014年に結婚を決めたときに、夫をお願いしました。それは、3.11以降、日本で暮らすには原発問題、そして放射能汚染の問題に向き合わなければならないこと、もし子どもを授かれば特に日本で安心して暮らすことが困難になるかもしれないこと、もしそのように判断したときにいつでも逃げられるよう準備をしておきたいこと。同じように危機感を抱いていた夫は共感しすぐに了承してくれました。

こうした考えに対し、世間では「大袈裟だ」「考えすぎだ」という人がいます。しかし、それは、3.11原発事故前迄には、水・米・野菜・魚など食品の(セシウムなど)放射能含有量などごく微量だったものが、2012年の事故後には、厚生労働省規制基準値を何千倍も何万倍も跳ね上げねばどうにもならなかったことで分かりますし、環境省指定の特定廃棄物という放射能が混じったゴミなどは、一般的に棄て燃やしてもよい基準値は、100Bq/kg～8000Bq/kgというように80倍にしないと成り立たない世界に変わってしまっていることからよく分かるのです。福島の事故は、それまでの暮らし方や人生設計を根底から変えるほどに私たちに大きな影響を与えたのです。

日本全国にある原発どこでも事故が起きれば、この小さな島国に安全な場所などなくなります。現在暮らしている北九州市は玄海原発からおよそ100kmの場



所にあり、30kmよりはるかに圏外ですが、それでももし玄海原発で福島のような過酷事故が起こった場合は、偏西風に乗って我が家にも高い値で放射性物質は降り注ぎます。チェルノブイリ事故では、爆心地から西側には300kmも飛散し、その地域は立ち入り禁止区域となっていました。更には1,200km離れたドイツにまで飛散していたそうです。放射能には県境も国境もありません。

玄海原発3号機再稼働後は安定ヨウ素剤をいつも持ち歩いています。近所の公園に行くときも、買い物に行くときも息子のおむつと一緒に持ち歩く、日頃からこんな用心をしている母親が私だけでなく日本中にたくさんいることをご存知でしょうか。どうして電気のために国民がこのような不安やリスクを負わなければならないのでしょうか。

育児のなかで私が一番気を遣うのは「食事」です。子どもたちは大人の何倍も放射能の影響を受けやすく、3.11以降の育児では「被ばく回避」の意識と知識が不可欠です。微量でも内部被ばくする可能性はあり、汚染が疑わしい食材は避けるしかありません。これは決して「風評被害」などではなく、実際に内部被ばくの恐れがあるものを体内に入れないという当然の危険回避策です。海洋の汚染は現在進行形で続いており、海産物については特に深刻に感じています。もしも玄海原発で過酷事故がおきれば、当然九州の食品が「汚染」されます。

3月23日に玄海原発3号機が再稼働し、そしてそのたった1週間後に蒸気漏れ事故、その後玄海4号機一次冷却系ポンプ事故が起きました。九電は原子炉を止めず、私たち市民の不安にもきちんと向き合った説明をしないまま、今日に至ります。市民が不安な毎日を送っていることを、九電は理解しているのでしょうか。

完璧な人間などおらず、ヒューマンエラーは必ず発生しています。原発も、不具合や故障、そして老朽化や劣化も起こっています。「絶対に事故が起きない」とは、国も電力会社も言えず、もし過酷事故が起きて誰も責任をとれないことは、福島の事故で実証済みです。

息子がもう少し成長したら、わたしはこの理不尽な事実を少しずつ教えていかなければいけません。その頃、行き場のない核のゴミで全国各地が埋まっていのでしょうか。プルトニウムの危険な黄色い看板が乱立し「立ち入り禁止区域」が広がっていないのでしょうか。第二のフクシマ大事故が起きていないのでしょうか。その時、「大人はこんなに危険な原発をなぜ止めなかったのか」「無責任に僕たちに核のゴミをなぜ押し付けたのか」と息子が怒っていないのでしょうか。そんな未来など想像したくありません。私は息子に胸を張って「お母さんはあなたのためにがんばって反対したよ、みんなで原発を止めることができたよ」と言いたい。

被ばく労働や環境問題、ウラン採掘の問題や核のゴミ問題に差別問題など、原発に関わるあらゆる問題を後世に残してはならないと思います。すべてが「負の遺産」です。

「負の遺産」は一日も早く無くしたいのです。すべての原発を廃炉にすること、子どもたちの健康を守ること、これは大人たちの責任です。

今日この場にいらっしゃる裁判長、裁判官、裁判所のみなさんをはじめ、すべての人たちが例外なく未来への責任に真摯に向き合うことで、どうか、玄海原発を勇気を持って止めてください。子どもたちに誇れる判決をしてくださるよう強く願っています。

ありがとうございました。

## 松村知曉さん意見陳述

### 全基差止第26回口頭弁論（6月1日）



(1)

私たちの願いもむなし、玄海原発3号機は再稼働してしまいました。しかしながら、稼働してすぐ、配管に蒸気漏れを起こすという事故を起こしてしまいました。配管だらけの原発、しかも7年以上も動かしていなくて、きちんと点検もできていない、事故が起こって当然といえ

ます。さらに5月2日には、4号機の原子炉容器内の放射性物質を含む1次冷却水を循環させるポンプ2台で、異常が見つかりました。もしも地震や火山、人為的ミスによる過酷事故が起こったら、誰が責任を取るのでしょうか。次から次へと事故を起こす九州電力は、原発を即刻止めるべきです。このままでは、必ずチェルノブイリや福島

第一原発のような過酷事故を起こします。

(2)

私の住んでいる人口157万人の福岡市は、玄海原発から40km～60kmの距離にあります。玄海原発で過酷事故が起これば、偏西風の影響で放射能は必ず福岡市を襲います。季節による風向きの違いはあるものの、いつの場合も風下に位置する福岡市に飛散してくるのは間違いありません。とりわけ、季節風の吹く冬の時期にはその危険がいつそう増します。

玄海原発で福島第一原発のような過酷事故が起これば、福岡市は飛散した放射性物質による放射能汚染は免れないでしょう。また、すごいスピードで飛来する放射性物質から避難することも不可能です。それどころか、偏西風は日本列島を全滅させるかもしれません。

(3)

福島原発の事故は終わっていません。

2011年3月11日に発生した地震と津波で、福島第一原発1, 2, 3号機がメルトダウンを起こし爆発しました。この時、放出された放射性物質の80%は太平洋へ飛散しましたが、20%は本州にまき散らされました。そして、その放射能は、北は岩手県南部から南は静岡県北部まで、東北・関東一円を汚染しています。しかしながら、政府は被曝許容量を年間1ミリシーベルトから20ミリシーベルトへと20倍に引き上げ、避難ではなく住民を被曝させるという暴挙を行っています。年間20ミリシーベルトというのは、1年間で胸部X線を約1000回、毎日3回浴びる量に相当するということです。とんでもないことです。

また、低線量でも長い期間の間、体内に取り組みれたり、吸い込まれたりして、被曝する内部被曝によるリスクを見逃してはなりません。とりわけ、猛毒のセシウムはカリウムと良く似ており、土や水に入りこんで、野菜、果物、肉、牛乳、米などを汚染します。そして、セシウム137に汚染された食物の摂取は、動植物の中で生体濃縮する傾向にあるといわれています。汚染地域に住む日本の子供たちは、同じようにセシウム137で汚染された大地に住むベラルーシやウクライナなどの子供たちのように、汚染された食物を摂取することによって危険にさらされています。32年前に起きたチェルノブイリ原発事故で、現地では今もお放射能による汚染が続いており、ガン、白血病、心臓疾患などさまざまな病気に苦しんでいます。ベラルーシ、ウクライナ、ロシア、そしてヨーロッパの多くを汚染した、半減期が30年のセシウム137が生態系から無くなるまで、180年から320年かかるだろうといわれています。チェルノブイリの悲劇を、フクシマでも繰り返そうとしています。なんと愚かしいことでしょう。

#### (4)

2年前の熊本の直下型大地震の恐ろしさを忘れてはなりません。

私の生まれ故郷は熊本県阿蘇市です。今もお避難生活を強いられている被災者の方々、小学生の頃よく遊んだ阿蘇神社の倒壊、熊本城の崩落を目の当たりにして心を痛めています。

熊本大地震で交通がいかに遮断されたか、少しお話ししたいと思います。

4月14日の第1回目の震度7の地震の後、山鹿にいる妹が、すぐに熊本市内にいる娘の所へ車で行こうとして5時間もかかったとのこと。通常40分位で行けるところが、いたる所通行止めなどで通れず、また渋滞にあって、とても時間がかかったのです。

また、阿蘇へ向かう国道57号線と豊肥線は立野の山体崩壊で埋まり、南阿蘇へ向かう阿蘇大橋も南阿蘇鉄道の鉄橋も谷底に落ちてしまいました。そして、益城町と南阿蘇を結ぶ俵山トンネルも一時不通になりました。

熊本市方面からは、大津町から外輪山を越えるミルクロードしかなくなり、阿蘇市へはとて時間がかかるルートとなっています。昨年秋、阿蘇長陽大橋が架かり、南阿蘇へは何とか従来どおり行けるようになりました。しかしながら、立野では、無人の建設機械が土砂を取り除く工事中で、57号線・豊肥線の開通はまだま

だ先のようなです。

また、断層が走った高速九州道の嘉島ジャンクション付近は、最近まで復旧工事をしており、渋滞を引き起こしていました。このように大きな地震は交通を寸断し、すごい交通渋滞と地域の孤立化を招きます。原発との複合災害が起きれば、避難することなど不可能だと思います。

日本中どこでも地震は起こり得ます。中央構造線は九州を横断し、各地を走る断層は網の目のように覆いつくしています。福岡でも警固断層を中心に福岡西方沖地震が、13年前に起きました。

佐賀県には、唐津城山南断層、竹木場断層、伊万里楠久断層があります。玄海町南部には、「にあんちゃん」の映画で有名な大鶴炭鉱があり、地下は石炭層で埋もれています。佐里温泉をはじめ、北松浦各地にも温泉が湧き出しています。過去にマグニチュード6から7の巨大地震が起きた形跡が、断層に残っています。そして、福岡県沖から佐賀県にならぶ3つの活断層は、つながっている可能性が高いといわれています。

また、世界的に見ても日本、チリ、台湾、韓国、中東、フランスなどで相次いで地震が起こり、地震の激動期に入っています。とりわけ、日本では、活断層による直下型地震は誰にも予想できず、日本列島は断層の固まりで、どこでも起こり得ることを示しています。阪神大震災、熊本大地震、2キロ四方の山が陥没してなくなり、人類史上最大の揺れを記録した岩手・宮城内陸地震など、日本中どこでも直下型地震の脅威が存在します。活断層が分からない所でも起こりえます。大地震の可能性を無視し、直下型を想定しない玄海原発は、再稼動してはなりません。

#### (5)

私は、生活協同組合で、安心安全な食べ物を組合員みなさんに届ける仕事をしてきました。そして、退職後、15人の仲間と一緒に、無農薬・有機肥料で野菜を作っています。

また、ラムサール条約の登録をめざして、「和白干潟」を守る活動に参加してきました。「和白干潟」は、博多湾の奥に残された干潟で、全国では2ヶ所だけといわれる貴重な自然海岸が残っています。砂浜、アシ原、クロマツ林や雑木林、湿地などがあり、多様な生き物を育む重要な干潟です。東アジアの渡り鳥の渡りのルートにあり、ミヤコドリや貴重な絶滅危惧種のクロツラヘラサギなども飛来しています。干潟の生き物、そして自然を守る立場からは、原発事故による放射能汚染は、生き物、自然にとって最悪の環境汚染、環境破壊です。

放射能は無味無臭で目に見えません。そして、空気、水、大地を汚染します。だから、恐ろしいのです。放射能と食べ物・いのちは相容れません。放射能と相容れない全てのいのちと地球の未来がかかっています。今からでも遅くありません。事故が起こってからでは誰も責任が取れない全ての原発を廃炉にすべきです。そして、今まで生み出した放射能汚染物質を処理するために全力を尽くすべきです。そのためにも、玄海原発の再稼動を止める判決が下されんことを切に望みます。

# 原発ゼロ！辺野古新基地建設阻止！安倍政治を終わらせよう！

戦争と原発のない社会をめざす福岡市民の会（「市民の会」）工藤逸男

1. 「市民の会」は、私が定年退職した後に、旧知の友人や反原発運動に取り組む知人に呼びかけ、2014年7月に立ち上げた市民団体です。活動の基調として「反戦・反核・反差別」の三つの課題を掲げていますが、反原発と反戦・辺野古新基地建設反対の活動が多くを占めています。私たちは、現地現場での行動にできる限り参加すること、住民・市民に直接訴えて運動を広げること、課題を共有する諸団体・個人との連帯・協力・共闘関係づくりをすすめること、などを基本的なスタンスとして活動しています。

2. 福島事故から8年目に入った本年、九州電力は事故などなかったかのように川内・玄海原発4基（総出力414万kW）を再稼働させました。その上で、天然ガスや石油の火力発電所7ユニット（総出力347.5万kW）を停止、廃止させ、原発の電気を優先的に市場に供給しています。秋には、再生エネルギー電気の抑制さえも目論んでいます。池田社長は「原子力は、CO2を出さず世界に貢献できる」（2018/06/29朝日新聞）と言い放ちましたが、九電は2019年12月に、石炭火力の松浦発電所2号機（長崎県松浦市、出力100万kW）の営業運転開始を計画しています。まったくふざけています。

今、世界は地球温暖化による気候変動を抑制させるため、脱炭素革命と呼ばれる再生エネルギーへの大転換の真っただ中にあります。世界の投資マネーは風力太陽光などの再エネに向かい、高コスト・高リスクの原発には向かっていません。その結果、再エネの発電コストは価格破壊と呼ばれるほど急激に低下し、原発の発電コストに勝るまでになってきました。原発に未来などないのです。“原発ゼロ社会・再エネ100%社会の実現”を確信をもって大きく訴え、その世論を高めていくことが必要です。

「市民の会」は、唐津市や福岡市内での反原発街宣と糸島市での反原発ポスティングに取り組んできました。中央区天神では、市・県外から来た若者に、署名をきっかけにしたり、福島事故の写真パネルを紹介しながら原発問題を話しかけています。唐津市大手口では下校する高校生にビラを渡して声をかけています。肥前町に住む女子高生が「自宅から海の向こうに原発が見えるんです」と原発への不安を話してくれたこともありました。平日の西区姪浜街宣は近隣地域にお住まいの方に出会うことが多く、チラシの受け取りも良く、反応も好意的です。糸島市では、2017年の9月からポスティングを始めました。糸島市の「脱原発いとしまネットワーク」や「風下の会」、福岡市の「今を生きる会」のみなさんとともに、各団体が作成したチラシをセットにしてポスティングを行っています。この活動でも、できるだけ住民のみなさんに話しかけることに心掛け、終了後にはその活動の交流をするようにしています。7月のポスティングで8回目が終了し、延べ参加者は173名、配布数は10532部となりました。

3. 反戦・憲法改悪反対の活動として、月一度の改憲反対天神街宣を企画し、マイクアピールやチラシ配布、9条改憲反対の3000万署名などに取り組んでいます。沖縄・辺野古



3/23 3号機再稼働抗議ゲート前行動

新基地建設反対の活動も行っています。本土復帰の日である5月15日の前後には、毎年、平和行進や県民大会、キャンプシュワブゲート前での座り込み行動などに参加するための沖縄行動を組んでいます。福岡市内では諸団体が主催する辺野古新基地建設反対の集会やデモもありますので、可能な限り積極的にかかわり共闘するようにしています。「ウイメンズアクション」「辺野古アクション・福岡」などの団体が呼びかける、火曜日の街頭行動にも参加するようにしています。福岡県総がかり実行委員会にも関わりながら、安倍政権打倒の世論を喚起し、運動の広がりをつくるための活動にも取り組んでいます。

4. 私たちは小さい市民団体ですが、自分たちにできることは何かをしっかりと考え、話し合い、多くのみなさんと力を合わせながら今後の活動を進めていきたいと考えています。みなさん！ともに頑張りましょう！

## 「市民の会」活動の軌跡

### 2014年

- 玄海・川内原発再稼働反対の諸活動を開始（7月～）
- 来んしゃい金曜！脱原発 毎（金）18時 九電前
- 辺野古アクション・福岡 毎（火）18時30分 パルコ前
- 8.9長崎反戦集会・デモ（毎年8月）
- 反ブルサーマルの日行動（毎年12月）

### 2015年

- 玄海原発の今！玄海町フィールドワーク（5月）
- 戦争法案廃案！天神集中街宣（8～9月）
- ウイメンズアクション 毎（火）17時30分 パルコ前
- 原発ゼロ唐津11行動（9月～）毎月11日 大手口前
- 玄海原発再稼働STOP！街宣開始 天神コア前（11月～）

### 2016年

- 『5.15平和行進・県民大会』沖縄行動（毎年5月）
- 九電株主総会会場前街宣（毎年6月）
- 「佐賀県知事へ玄海原発再稼働の不同意を求める署名」運動開始（10月）

### 2017年

- 「佐賀県知事へ玄海原発再稼働の不同意を求める署名」提出（2月）佐賀県庁（提出総数40280筆）
- 糸島ポスティング開始（9月～）

### 2018年

- STOP！憲法改悪街宣開始 天神コア前（2月～）
- 『事故から8年目の福島の現実に学ぶフィールドワーク』（9月予定）



事務局リレーコラム 油絵の具のにおいから 武富泰毅

このところ、30数年ぶりに油絵を描いている。高校生の自分の作品にさえ届かないのはなかなか悲しい。それでも油のにおいや、キャンバスに塗る絵の具の感触は16歳のまま。あのころいろいろ悩み事はあったよな。進学校だったんで、勉強の悩みが一番だったかな。それともありがちな青春の懊悩(おうのう)かな。

すったもんだあった挙句、鹿児島大学行くことになったんだけど。運動原発に関しては当時チェルノブイリの原発事故直後で、なんとなく話だけは知っているのレベルだった。まあ普通の学生ですね。悪友に勧められ読んだのが、広瀬隆さんの「危険な話」。「本当かなあ」というのが直後の読後感だったのを覚えている。

それでもひっかかる場所があったので、当時大学の生協にあった原発関連本はほとんど買って読んだ。大体半年学校に行かず、毎日原発の本を読んでいた(88年、伊方の出力調整実験の頃)。ある晩いつもどおり原発の本をよんでいたら、ふと「この膨大な知識量を本当に理解している人間がいるのか」と疑問が

わいた。

設計する人間は本当に設計どおり施工されたのか1つ1つ分かっているわけではないだろう。科学的知見も先に進むにしたがって、新しい活断層が見つかるかもしれない。これを人間がすべて前もって知り、制御することが可能か。——本当に怖くなった。「危険な話」の本当の意味は、少なくとも自分にとってはそういうことだった。

鹿児島大には物理学科に橋爪さんという教員がいて川内原発の建設時からずっと運動を続けていた。当時やっていたのは食品の中の放射能を測る作業で微力ながら手伝ったりした。あとは事故があるたび九電の鹿児島支店に申し入れに行ったり、草の根的に運動を長く続けていた。

さて、冒頭の悩みの話だけど、原発と出会ってしまってから、とにかく原発事故がこわかった。そして今に至る。(たけとみ やすき/佐賀市)



お知らせ

■ 裁判傍聴をお願いします！ ■

●全基差止・行政訴訟 口頭弁論

9月28日(金) 佐賀地方裁判所

14:00～行政第19回弁論

意見陳述:荒川謙一さん(宗像市)

14:30～全基第27回弁論

意見陳述:進藤輝幸さん(唐津市)

15:00～記者会見・報告集会(赤松公民館)

傍聴席を  
いっぱい!

●玄海3・4号機再稼働差止仮処分  
抗告審・法廷プレゼン

10月29日(月)

14:00～福岡高等裁判所1015号法廷

福岡市中央区六本松4-2-4 地下鉄六本松駅徒歩3分  
旧・九州大学六本松キャンパス

17:00～記者会見・報告集会(予定)

裁判所が  
移転しました

会員募集中!

■年会費 原告会員1万円。支える会会員5000円。  
サポート会員一口1000円～。団体会員も歓迎!

■振込先:郵便振替口座 01790-3-136810  
玄海原発プルサーマル裁判を支える会

命を守るために頑張りましょう!  
カンパをよろしくをお願いします

会員数(2018.9.5現在)

原告総数 904名  
支える会・サポート会員 991名

原告内訳  
仮処分債権者 173名  
全基原告 349名  
行政訴訟原告 382名

脱原発パネル展2018

9月12日(水)～18日(火)

佐賀アバンセ 1階ギャラリー 10～20時

※17日休館 18日15時終了

私たちが守りたいもの 残したいものは何?

原発と放射能の現実、玄海原発の今を  
パネルにしました。ぜひご来場ください。

第9回 12.2反プルサーマルの日行動

12月2日(日) 10:00 玄海町役場集合(予定)

2009年12月2日、九州電力は玄海原発3号機で日本初のプルサーマル運転を強行。私たちは毎年この日に行動を続けてきました。今年も玄海町でみんなでポスティングを行います。ぜひご参加ください!

あなたのチカラが必要です!

●座談会しませんか?

原発のこと、命のこと。少人数で本音トークをしませんか。1人からでも、どこへでも行きますので連絡ください!

●事務所ボランティア募集中!

資料整理、チラシ印刷、手作りグッズ作成etc...作業がいろいろあります。ご都合のいい時におこしください!

●玄海町や市町と一緒に訪問しませんか?

●最新情報は以下をご覧ください。

ホームページ <http://saga-genkai.jimdo.com/>

フェイスブック <http://www.facebook.com/genkai.genpatsu>

